

料理の楽しさ 伝えよう



手作りの弁当を見せる田原小の6年生＝2015年11月、熊本市北区

子どもたちが献立を考え、買い物や調理、片付けまでをする「弁当の日」。提唱者の元小学校長、竹下和男さん(67)＝香川県綾川町＝が9月末、熊本市で講演し、「食事を作ることは楽しいこと。自分で食事を作るようになるれば、その子が親になったとき、楽しく子育てができる。子どもを台所に立たせよう」と訴えた。

「弁当の日」提唱した竹下和男さん

講演会は、同市の母親らでつくる熊本「弁当の日」応援団の主催。

「弁当の日」は2001年、竹下さんが校長を務めていた香川県綾川町の小学校で始めた。今では、47都道府県の小中高約1800校に広がっている。

「初めはブーイングの嵐だった」と竹下さん。PTA総会で「弁当の日」を提案したところ、保護者たちから「包丁を持たせたことはありません」

「朝は時間がないので無理です」などと反対の声が上がった。

しかし、実際に「弁当

の日」がスタートすると、

親や教師も驚くような効果があったという。子ど

もたちは弁当を見せ合

い、「自分で卵割って卵

焼き作ったんやで」と自

慢したり、「次は友達があ

つと驚くような弁当を作

ろう」と献立を考え始

めたり…。竹下さんは「子

どもに食事作りは無理な

のではなく、やらせてい

ないだけだった。子ども

たちは料理が楽しいと思

うようになった」と振り

返る。

「弁当の日」の対象は、

家庭科の授業がある5、

6年生で、年5回ほど実

施した。4年生以下は弁

熊本市で講演 子ども 台所に立たせて



「子どもを台所に立たせてほしい」と話す竹下和男さん。提唱した「弁当の日」は全国に広がっている＝熊本市

当に憧れ、5年生になるのを楽しみにするといふ効果もあったという。

竹下さんは、家庭での環境づくりも必要と指摘する。台所で食事を作っている、子どもが「自分でやりたい」と言い出す時期がある。

「そこで『向こうに行つてなさい』と追い返す親が多いのは、もったいない。人は置かれた環境に適應するもの。自立しようとするときに、その環境を与えることが大切」

「忙しい」と思っても、「大人の都合より子どもの未来を優先させることが子育て」と竹下さんは強調する。「子どものためには、料理より勉強が大事と思っていまじせんか。それは、自分のことだけ考えればよいと教えるようなものなんです」

竹下さんの心配は、「料理の楽しさ」を知らないことが次世代の子育てに

も影響しかねないことだ。

高校を卒業しても、ご飯とみそ汁が作れない子どもがいる。食事代わりに、菓子パンやクッキーなど甘い物ばかりを食べ、苦味や渋味の味覚が分からない学生もいるといふ。その子どもたちが親になったら、「子どもの食事を作ることを苦痛と感じ、子育てが楽しくなくなってしまう」

「弁当の日」をスタートした当時の小学生は今、29歳になった。「ごく普通に料理をして、子どもにも料理をさせている大人になった」。「弁当作れば高校受かるんか」と反発した中学生も大人になった今、「弁当の日があつてよかった」と話すといふ。

「親が子どもに伝えるべきことは、日常の中にある。子どもが作った料理を家族が喜んで笑顔で食べれば、子どもは発達する。家族のために料理をすることは楽しい、という感覚を育ててほしい」(森本修代)

※竹下さんの著書には「できるーを伸ばす弁当の日」(共同通信社)、絵本「弁当の日」(がやつてきた) (河出書房新社) などがある。

食育最前線2

進化する!! 「弁当の日」

実践した教師らの報告を集めた「進化する!! 「弁当の日」」